☆農村だより☆

丘と濱

大田遼一郎

一

不知火海に面した天草上島の一農漁村。しずかな入江は多の鈍い反射をたたえているだけで、幾隻かの小さな石油發動機船や傳馬舟がもやわれている村の渡止場には、人影もない閑散さ。傾斜地が海に迫ったところに、村びとがアコーの樹と呼んでいる榕樹の老巨木があおぐろい重厚な葉を茂らせ、その下には龍王神が何かをまつつている。そこをまがると藁家も交つたゴミゴミとした漁村の聚落。天氣のよい日は南向きの縁側で網つくろいなどをしているが、ひつそりと雨戸をしめたまゝの家も多い。

漁民部落を突きぬけたところから農村の光景がはじまる。山と山とにはさまれた海岸平坦部が遠くのびて、村はずれ、島の中心に近いところは、海の見えない山間地帶である。今は一月なので、裏作の麥が二、三寸に伸び、ところどころにグリンピースが白い花をなよなよと風に搖るがせている。丘には蜜柑、空には鳶……。

こんな風に書いていくと、下手な叙景文めいて恐縮であるが、要は、天草の島といつても何の〜ンテツもない南國海邊の僻村に過きない。だが全體として、明るいうちにも何かさびしい雰圍氣を感じさせる。そのゆたかさは、冬とはいえ光線にめぐまれた自然の眺めから來るが、わびしさは、日本の村々に共通な生活・營みの低さ暗さからのほかに、島の世界の、取り殘されたような活氣のなさからも來るようである。

交通の不圓滑な、文化の便益にもめぐまれぬ、多分日本でも一番おくれている地方に屬している島の村の諸生態が、今後私の調査・勉强の對象である。こゝでは私のいる研究村について、九州農漁村の一つの型とその最近の動きを大まかに素描してみたい。

表題に丘と濱と銘うつた意味は、こちらでは農家のことをオカといゝ、漁家のことをハマといつているのに由る。ついでに農漁民の生活利害の對比・相關・交流をも眺めてみたいというわけである。

二

村の總戸數は昨年秋の國勢調査で一、一三八世帶、人口五、七三三であるが、夏の臨時農業センサスによる農家戸數は八八九、世帶人員五、〇二二に對して、漁業會登錄の專業漁業戸數一一三で

あるから殘り一三六戸が非農漁家となつている。總體で五部落のうち四は純然たる農業地帶。殘り一が農漁民部落並存、商店などはその境目邊に集つている。われわれの村はこのように全體として主農從漁であるが、隣接の村々は規模もはるかに小さく、われわれの村の一部落程度のものが多く、その形態も主漁從農或は半農半漁などである。

村の耕作面積は田二九四町四、畑一四七町六、林野四、二二町四、從つて一戸當りの平均耕地は田三反三、畑一反六という狹さであるが、大草の村としてはそれでも最上位にある方で、供米も本年度分は昨年と殆と同じく一、四四二石、郡全體五十七町村のうち二位か三位にある。今年の査定反收一石六斗四升という低さであるが、反當り一、二俵から三、四俵という痩せた山田の多い島の村々のうちでは、まだ豐しような方なのである。山林をはじめ兼業對象が比較的多くて、上島では一番富裕な大村とされている。

經營面積別にみれば三段未滿の農家が二二〇、三段—五段三八〇、五段—一町二三四、一町—一町五段五五で、それ以上はない。五段未滿が六七%餘も占めているのだから、全國平均の三九・二%よりはるかに下廻つている。階層別にみると自作は四七八で三段—五段二二二、五段—一町二一一、一町—一町五段五五。自小作は一〇〇で三段未滿二七、三段—五段六四、五段—一町九。小自作は二一三で三段未滿一五七、三段—五段四二、五段—一町一四。小作は九八で三段未滿三六、三段—五段六二となつている。

土地所有關係の樣相をうかがうために、同樣農業センサスの統計によれば、貸付耕地のないもの五九五、貸付耕地二段未滿一五二、三段—五段七六、五段—一町五四、一町—二町六、二町—五町五、五町以上は唯一名となつており、これまた小地主が大部分であることを示している。耕地面積が狹く且つ小地主が多いことは、耕地を益々細分化せしめると共に、小作率を異常に高額なものにした。現物小作料は從來反に籾五俵程度が普通の基準になつていたが、肥料の豐富な時で反八俵もとれる田は、この島としては上田に屬していたのだから、最も好條件においても六斛から七斛に及んでいたのである。小作人たちは、それでも少しでも多く田畑を借りようとして、みすから「うわまえ」即ち小作料をせり上げつゝ「親方」即ち地主の前に叩頭していたわけである。

更に經營のますしさを示す技術的指標としては、九百戸近くもある農家のうちに原動機は一〇臺、動力作業機も一〇臺あるかなしという數字にもあらわれている。脱穀は足踏が大分普及しているが、動力脱穀機は所有者の富農が村中を移動してまわる。たゞ人家畜だけは、馬は一五頭にすぎないが、牛六五四頭という異常さである。しかし乳牛は一頭もいない。全部役牛であるが、その内十八ヶ月未滿の仔牛が二一〇餘頭いる。これは農家の牛の飼養に對する主たる關心が、有畜農業による經營の合理化というよりはむしろ、仔牛の賣却にあることを語るものゝようである。村の中農以上にとつて、仔牛を賣ることはまとまつた現金收入の最

犬の道になつているが、米麥作とかいも即ち甘藷だけでは立ちゆかない耕地の狹さ、經營の過小性が、農家の大半をして當然兼業農家たらしめているのである。統計面では一應專業農家は四八四、兼業第一種が三六〇、同第二種が四五となつている。兼業の主なる種類は、第一第二を併せて森林業九一、製炭四三、漁撈二〇、農業日傭季節傭二〇、林業賃勞働二七、その他の賃勞働一四。即ちこの村では、零細農の山林に依存している度合が大きいことを示している。農業收入別農家數によれば、自給農業三二六と「いずれの收入も四割にみたないもの」三七七で、養蚕、煙草栽培收入はいずれも僅かであつて、兼業の家計補充度の低さをあらわしている。

更に統計の上では專業農家となつている部分でも、記載し得ない「副業」のあることを見逃せない。それは天草の主要畑作物からいもを原料とするようちうの illegale brauen である。その用途は勿論自家消費をも含むが、村の「ブライヴエート」なインフレ便乘的若くは對抗的な商品化經濟にとつて、相當な役割を果している。仔牛の販賣も正當なセリ市を通じたものは、今年は三〇頭だけであつたし、養蚕、葉煙草についてどこでも行われていること、非農家や漁民による食料の買出し、材木、薪炭の森林組合を經由しないで積出される分などが、その比重は階層別によつて異るが、多かれ少なかれ「副的收入」の源泉をなしていて、公の統計からはとらえ得ない數字である。そしてそれが今迄ある程度村の經濟特に農家經濟を「うるおして」來たことは事實である。

しかし乍ら、第一に九州全土から島へ渡る交通は、そんなに簡便ではない。ヤミ商人やブローカーがやつて來ても、買付のルートがよく調査され手引されていなければ、輸送費などに喰われてしまう。第二に、主食や蔬菜にめぐまれぬ、鳥の他の村々による需要が多少はあるにしろ、その消化率は極めて小さい。ある篤農は、去年大根を作りすぎて賣先きに困つたから、今年は自家用分だけしか作らなかつたといつていた。第三に、行政的な取締りもしばしば強化される。しようちうしぼりも隣りの村々ではすでに稅務署の手入れがあつた。しようちうは影響する。一方島に渡つて來る商品の値は高い。稅金も大きい。仔牛を三萬圓で賣つても、その六、七割は稅金で消えるといつている。そのようなわけで、島の村は、都會近郊の畑作農村のような偏在的雰氣は到底おう歌することのできない不利な條件を最初から背負つているのである。たまたまインフレ利得農民があつても、それは山持ちの地主、富農、果樹園所有者、職業的なしようちうしぼり、ブローカーなどであつて、一般の農家は問題にならない。一部特殊の階層の場合は、明かに商品販賣であるが、一般の場合は、家計補充の勞力販賣と補い合う、必需品購入のための窮迫販賣的な性質が強い。

全體としても、農家の現金はいよいよ底をついて來たという聲が、この秋頃から高くなりだした。農業會に來る供出代金も片つぱしから拂出されるし、郵便局の貯金勸誘の成績もよくない。非

農家の物交買出しや、行商の持つて來るもので、多少の衣類はふえ、惣菜にも肴をくう度合はふえたに違いないが、農家經營を改善するための資本は、この島の村々には殆ど殘らなかつたというのが事實のようである。

加うるに去年の秋はまた、一昨年あたりから蔓延している黑斑病と日照りのため、から芋の出來がひどく惡かつた。昨年の供出割當は二十三萬貫、今年は僅か六萬五千貫だが、それでも本年の方が苦しいと農家はいつている。こちらの農家は米麥收量の少なさを補うために、三度に一度は芋を食つているのだが、それが不作となるとそれだけ主食の減少を意味する。から芋收穫減のため、供出したあとの保有量だけでは來年五月の麥まで持つかどうかという農家が可成りあるとのことである。

三

オカはしかしまだいゝ方である。食うものだけはどうにか持つている。さんたんたる狀況を呈していろのは、今年の秋以後のハマである。

漁村といえば、農村にもましてインフレ氣氣にめぐまれているだろうというのが、一般の想像であるが、事實は必ずしもそうではない。われわれの村のような不安定な基礎脆弱の零細漁業の場合は、まさにその適例である。天草郡は元來熊本縣の水産物供給地帶であるが、實際にそれを果しているのは、下島の南端牛深港と御所浦一帶だけ位である。

牛深はイワシとブリ漁で有名であり、戰前には漁船九百隻、減少した現在でも三百數十隻を持つている。イワシも最盛期には一日の水揚數萬貫は珍らしくなく、漁撈の方法も相當近代化しているが、われわれの村や附近の漁村などは、いずれも年間の魚獲數萬貫程度で、村内の自給自足を少しばかり上廻るかの違いで、大都會への大量出荷などは到底できない。村に三軒のイワシ網問屋があるが、その漁撈の方法は、牛深港のように曳船、母船、火船と一組になつて、東支那海の荒海に乘出し、大羽、中羽イワシを漁獲するキンチャク網、八田網方式ではなく、目のこまかい舟曳網で、村の沖合の波しづかな入江に廻遊して來る小イワシやシロコをとらえるやり方である。この問屋資本は、船、網及び製品加工施設を持つているが、われわれの村では大體一問屋に十五人位のアミ子が依存している。だから漁民部落の半ば近くの世帶が、アミ子收入を基本にして生活しているわけである。

さらにアミ子と問屋との關係は、姻戚や緣故の紐帶で結ばれている場合が多い。問屋の權威は絶對である。魚獲收益の配分割合は五分五分若くは問屋四アミ子六である。問屋はなお生イワシを加工して乾製品として商品化するが、その商業利潤、投機利潤はもちろん問屋だけのものである。中羽、小羽イワシの煮干がイリコ又はダシジャコになり、シロコの場合はチリメンジャコになる。入江のイワシ漁期は、外洋の大羽ものが冬期であるのに反して、四月から十一月末である。イワシ漁は隔夜だけであるが、月に二十日の出漁で、アミ子に對する配當は、われわれの村で最近

は二千圓から四千圓位はあつた。村の乏しい生活では、それだけの基本收入が保證されれば、あとは家族の副業などでとうにか喰えて來たのであるが、昨年の秋以來、村の漁民の大半を養つて來たそのイワシが、少しもとれないのである。イワシの廻遊系路に變化があつたのか、水産試驗場でも調査中とのことで原因は不明であるが、來る日も來る日も「きようもシャだけ」というなげきがつゞいた。シャとは菜のなまりである。僅かの漁獲をわけて、アミ子の家族の菜となる程度である。ある問屋で四十日間の配當を計算したらアミ子一人當り二百餘圓というウソのような數字であつた。不漁となると焦りが來る。網を休ませるひまもなく無理をするために、網の損耗も早い。今迄の漁民部落の冬ごもりは、秋の稼ぎの蓄積と冬期山はたらきなどでまかなわれて來たのであるか、そのたくわえがまるでないのである。

十二月はわれわれの村で主食の配給が、指令の關係とかで十日ほどおくれた。それまでに何とか工面算段しておいた配給用の金も、おくれている間に主食のヤミ買いに使つてしまつたので益々困つた。それでハマの代表者たちがそろつて役場に交渉に出かけ、ようやく出してもらつたという出來事も起つた。冬の間を稼ぐために去年は流行の鹽づくりなどもあつたが、今年はそれも行きつまつている。若いアミ子たちはもう大かた八代あたりの干拓工事に出かけて行つたとのことである。

問屋もまた小經營であるために、勿論アミ子ほとではないが、それ相當に困つている。今迄アミ子に前貸をしていたが、今年の冬はそん餘裕があるかどうか。しかし冬になれば潛水夫を使つてナマコなども採るし、發動機船への油の配給もとにかくあるし何とかやりくりはつく。とはいえ問屋にとつての最大のなやみは、何年か後には新しくやり代えねばならぬ漁網、漁具資材の入手難である。縣水産會を經て來る配給の絲などは、補修用にも足りぬ。今のところストックでまかなつているようだが、この二、三年間にこの問題の解決がつかねば、根本的に業種轉換を迫られるわけである。

イワシ網漁業のほかは、揚繰網、刺網、打瀨網、延縄一本釣、たこつぼなど更に零細な小漁業であるが、いずれも家族勞働以上に出ない。收入もどうにか一家を支えていく程度である。そこで漁民のかみさんや老婆たちの仕事は、天秤棒でカゴをかついで、一本釣の獲物や、網元から買つた蒸魚や、菜にもらつたものを農家に賣りにいくことであつた。こちらではそれをメゴかつぎ又はメゴ賣りといつている。統制が強化されない間は相當高値に賣つて、農家の不平の種となつていたが、ともかくそれによつて主食の不足をおぎなうことができた。しかしそれも生鮮食料品の登錄店制や公定價格取締以來不能となつて、おかみさんや老婆たちも失業してしまつた。家族の多いところでは、誰かゞしようち汽船や汽車に乘つて、小「ブローカー」にでもなるより外に途がないわけである。

四

われわれの村におけるオカとハマの現狀は、大體以上のようである。もう少し補足すれば、島全體としてそうであるが、この村の重要な特徴として海外出稼が非常に多かつたことである。農漁業ともに經營規模の零細性から、農家の二男三男は村で働く餘地はなかつた。漁民の方も若い男女は殆ど出てしまつて、あとに殘るのは老人はかりであつた。天草娘は遠く明治の中期から、北滿や新嘉坡邊にまで進出して、甚たノートリアスであつたのだが、第一次大戰後の農村恐慌は、さらに大量的な家族的な出稼移民の道をえらはしめ、離村現象を恒常化せしめた。山畑を拓いて作つたから、いもなどは打棄てて、農民たちは滿洲へ朝鮮へと流れていつた。そこで「藥賣り」や小店舗や、下級俸給生活者など、植民地における最下層の生活に入つていつたのである。もつともそのうち料理屋や宿屋などで成功した者も若干はいる。村に珍らしい硝子ばりの大きな家や、都會風の建築は、大抵滿洲あたりから持ち歸つた金でたてられたものである。そのようにして新らしい地主もうまれた。漁村に殘つた老人たちは、息子や娘の送金をアテにして暮していた。何の特殊技能もなく單身で出ていつた娘たちが、どういう職業をえらんでいつたかについては、いうまでもないであろう。いまは昔おばあさんや中年増になつてしまつているが、若い時には家のためにギセイになつた經歷をもつている。そういう「人身御供」を出さすにすんだ家はむしろ例外的であつた。一般的な風習になつてしまうと、それに對する恥辱感などは消え失せて、かえつて娘を小學校の教員や郵便局の事務員に仕上げたりする親は「家のためにもならぬことを」と、その堅氣さをわらわれたとのことである。オカの方は、たとえ娘が村を出るにしてもます國内の女工をえらんだ。そしてハマの行き方に對する一種のサゲスミを持つていたようである。

さてこれらの海外生活者たちが、敗戰により半プロレタリケ化して引揚けて來たのであるから、過剩人口は村の小さな經濟に益益壓迫的に作用している。昭和二十一年四月二十六日の村の人口は五二一人。その時はすでに朝鮮、臺灣、華北からは大體歸つて來ている。その後北滿からの引揚を加えて五、七三三までになつたわけである。地理的な關係もあつて戰災疎開者は非常に少い。大部分が引揚者で、多い時は千人を越えていた。しかしわれわれの村はまだその比重が小さい方で、山を越えたある小村などは、三人に一人が引揚者だとのことである。農家でも引揚げて來た不在地主の土地取上げや、二、三男への耕地分與、それによる零細農家の增加など面倒な問題が起つているが、漁民部落では、アミ子はすでに飽和狀態以上だし、一本釣も舟から作つてカムらねばならぬから容易ではない。農漁家とも半失業者は何とかして村を出ようとしている。屈强な若者たちは炭坑などにも出ていつたが、娘も最近は大阪あたりの紡績工場の募集人に大分つれられて行つた。ハマでは現在でもやはり、女工より「女中」をえらぶ者が多いようである。

出稼はしかし漁民部落のあり方に決定的な影響をあたえていた。三、四十年昔は、われわれの村も當時としては進取的な漁撈の方法や組織で、附近漁村をリードしていたそうであるが、働き手が段々海外に出て、村に殘つた老人たちがその送金で暮すようになると、荒海に乘出すような危險はさけて、次第に、湖のような入江で小遣いどり程度の漁業に退化してしまつた。そしてこの十年來イワシ漁が固定化して來ると、村に殘つた壯年漁民も、戰時中の油不足などもあり、チャツカーと呼ばれている輕油發動機の小船などは賣つてしまつて、問屋依存アミ子一本の生活に轉換した漁民が增加して來たわけであつた。ところが今年の村のような不漁になると、小さな網や一本釣を細々ながら固守していた連中に凱歌があがつている。この連中は米替えだけの魚はどうにかとつて來るからである。

今後このような漁村若くは漁村民部落はどうなるのか。どうすればよいのか。部落の古い指導者たちには策もないようである。海外から歸つて來た壯年の小數の人たちが、深刻な現狀を憂えている。牛深のようなキンチャク網を船もろとも新造すれば數百萬圓仕事である。八田網の小型のものでも百萬圓から百五十萬圓はかゝる。遠淺を利用してカキやアサリの養殖を考えても、その禁漁がむずかしい。干潟はいつも貝堀りの村人で一ぱいである。濫獲で益ゝ形は小さくなり數も減つていく。

こういうハマの窮狀が村全體にとつて、その大部分を占めるオカにとつて、漸次負擔となつていくのは明らかである。公租、公課、寄附金制當の問題などでも、ハマは次第にその特殊性を强調せざるを得ないであろう。が、オカにとつてもハマを積極的に救濟するような力はない。オカ自身もたゞさえ不利な島の諸條件において、戰爭中から荒廢にまかされ、インフレの時代にあつてもその內容を改善向上せしめ得ない農家經濟の上に、いつかはおそいかゝつて來るであろうところの、或はその影がすでにさしているかも知れない農業恐慌のまぼろしにおびえはじめているからである。

オカとハマが、村の自給自足的な經濟面において、對極物としてお互に補い合つていることはいうまでもない。しかしお互の零細性と貧困の故に、その利害はしばしば利己的に對立する。農家はサカナが高いから田畑のものを安くは賣れぬといゝ、漁民は又野菜が高いからサカナも安くはできぬという。お互につり上げ競爭をやるが、町や附近の村の相場が結局盲目的な平均力として作用する。秋のころ漁業會や農業會が間に立つて、公定價格の三倍程度ヤミ値を少し下廻る邊を協力價格にし、旁ゝ各部落に新しく設けられた素人鮮魚登錄商を末端小賣機構にして、漁業會に荷する方法がとられた。一、二ヶ月可成り圓滑に運營されたが、春からの公定價格强制でそれも駄目になつた。漁業會には一尾のサカナもあがらなくなつた。

カキやアサリの養殖にしても、一時漁業會で計畫したこともあるそうであるが、ハマで貝をとらせぬことにすると、山の枯柴を採らせぬそという抗議が、オカから出て沙汰やみになつたという

ことである。村では私有林でも、枯木、枯松葉、杉葉は自由に採取していゝ習慣になつており、それがハマにとつても燃料の源泉になつているのである。若しそれを止められたら大問題である。

習俗や氣風の點からいつても、オカとハマは對蹠的である。オカは萬事地味で、鈍く、勘定高いが、辛抱强い。ハマは派手で、すばしこく、金放れもいゝが、耐久性に乏しい。村の運動會などでも、短距離やリレーは、大がい濱部落の青年が勝つが、長距離や重量揚げになると、オカ組の旗色がよい。應援團などもハマはいつもざん新な意匠や企畫でオカを壓倒する。ハマには引揚者なども多くて、都會的な要素が多いせいもあるが、根本的には生産條件や勞働の組織、家族形態など生活環境におけるオカの分散固着性と、ハマの集團流動性の相違に基くものであろう。婚姻や養子縁組はオカの部落同志の交流は多いが、ハマはハマだけで、オカとの結び付はまず絶對にない。しかしこれらの氣質の相違も勿論相對的のものであつて、島の人々らしいかたくなな保守的な排他性は一樣である。

五

私はこの散漫な報告を、あまりに暗くペシミスティソクに書きすぎたかも知れないが、島の停滯後進性に加うるに、インフレーションの不均衡性によつて一層强く感じられるわけである。

島の村は、たしかに幾多の自然的社會的諸條件の制約によつて非常に不利である。しかしながらわれわれの村も米、麥、からいも作の基本農耕のほかに山林、果樹、畜産、養蠶、煙草と、漁業の種類もできる限りのことは殆とやつている。たゞ輸送、市場、購買力などの關係で、その商品化は活潑でなく、加工業もおこらず、發展にはまれている。だがその阻害條件は絶對に克服できぬものではない。漁業もまた特殊な事情で、消極的なものになつてしまつているが、附近に豐富な漁場を控えているし、新しい合理的な漁撈方法や組織を、進んで取り入れさいけば、その更生は決して不可能ではないであろう。オカとハマとの關係も、分散、孤立的な或は排他利己的な過小生産、商品經濟の下に放置されている限りでは、その生活實體が客觀的にはお互に補足し受益し合つているにも拘らず、表面的にはうとんじ、しりぞけあつている。しかし近く農業協同組合もうまれる。漁業會もそのうち協同組合に再編成されねばならぬだろう。そうすれば兩者が强く有機的に結びつけられて、村の經濟・生活が一段とゆたかに向上する可能性も生じてくる。その新しい運營に望みがかけられるわけである。そのためにも、今の村にとつて何よりも必要なのは、人間＝指導者であろう。（一九四八・一・一三）

（熊本縣駐在研究員）